リアクタンス特性と集団主義・独自性・説得効果の関係

北海道教育大学 今城周造

Reactance proneness, collectivism, uniqueness, and resistance to persuasion

Shuzo Imajo (Hokkaido University of Education, Hachiman-cho, Hakodate 040-8567)

This study examined the reliability and validity of Japanese psychological reactance scales. A total of 167 undergraduates completed a questionnaire of Therapeutic Reactance Scale (TRS), the Hong Reactance Scale (HRS), the Uniqueness Scale, and the Collectivism Scale. They also received messages involving three persuasion situations that were either high or low in terms of threat, and were asked to describe their reactions to them. The author categorized the reactions into three: acceptance, indirect resistance, and direct resistance. Reliabilities of the reactance scales were satisfactory. Their scores positively correlated with uniqueness scores, and negatively with collectivism scores. Those high on reactance proneness were less persuaded in two of the three situations. But in the third, an HRS by threat interaction was observed, indicating that only those who were high on reactance proneness under the high-threat condition showed resistance to persuasion. These results suggest that the Japanese versions of reactance scale were reliable and valid. However, the assertiveness aspect of TRS may not be appropriate for the definition of reactance. The influence of culture on psychological reactance was also discussed.

Key words: reactance, uniqueness, collectivism, culture, resistance to persuasion.

本研究の目的は、二つのリアクタンス尺度 (Dowd, Milne, & Wise, 1991; Hong & Page, 1989) の信頼性と妥当性を比較・検討することである。その際、文化的要因や説得効果との関係に焦点を当てる。

心理的リアクタンスとは“自由が侵害されたときにその回復を目指す動機づけ”である (Brehm & Brehm, 1981)。禁止や強制、高圧的説得はどれも自由を脅かすので、人はそれに抵抗し、自由を回復しようとする。この予測を支持する報告もあるが (e.g. Snyder & Wicklund, 1976)、高圧的説得に対して抵抗が生じなかった報告も少なくない (e.g. 上野, 1986)。

その理由としては、リアクタンスに関する個人差が挙げられる。Merz (1983) はリアクタンスの生じやすさの程度自体をパーソナリティ特性ととらえ、リアクタンス特性を測定する 18 項目のドイツ語による尺度を作成した。Tucker & Byers (1987) はこの Merz 尺度を英語に翻訳したが、因子の妥当性が不十分で実用に耐えないと結論づけている。Hong らは後にこの英語版 Merz 尺度を改良して、Hong リアクタンス尺度を開発した (Hong & Faedda, 1996; Hong & Page, 1989)。

一方これらの Merz 尺度に端を発する研究とは別に、Dowd et al. (1991) は治療リアクタンス尺度 (TRS) を作成している。しかしその内容は“意見を

闘わせるのはおもしろい”など、自由回復の動機づけとは関係ないものも含んでおり、リアクタンスという構成概念と TRS の対応には疑問が残る。

ところで今城 (2001) は、リアクタンスの個人差だけでなく、その文化差を検討する必要があることを指摘している。リアクタンス理論では行動の自由は前提であり、諸個人が自由を期待しているからこそ、自由侵害に対する自由回復行動の生起は一般的な法則性をもつ。しかし人々の大多数が自由を期待していることを、我が国でも前提にできるだろうか。Kim, Triandis, Kagitcibasi, Choi, & Yoon (1994) によれば、西洋の個人主義文化では、人は自律的・自己支配的・独自のであるように、また選択の自由を価値づけるように仕向けられる。一方、東洋の集団主義文化では、個人主義的欲求は抑圧され、相互依存と承諾が重要とされる。このように、リアクタンス理論が前提とする自由や自己支配が個人主義と表裏一体であるならば、我が国を含む集団主義文化では、リアクタンス現象が生起する可能性は低いことになる。

Yamaguchi (1994) は、日本人には集団主義傾向が強いこと、集団主義傾向は独自性欲求 (Snyder & Fromkin, 1977) を弱めることを指摘している。独自性欲求とリアクタンスの関連については上野 (1986) が実験的検討を試みたが、分散分析の結果では、意見変化に有意な要因効果は見られなかった。本研究で

は、リアクタンス特性と集団主義・独自性欲求の関係を調べることで、リアクタンスの文化差を考察する。

本研究の仮説は次のとおりであった：リアクタンス特性が強いほど、説得に抵抗するであろう（仮説1）。集団主義傾向が強いほど、リアクタンス特性は弱いであろう（仮説2）。独自性欲求が強いほど、リアクタンス特性も強いであろう（仮説3）。

方 法

被験者 被験者は大学生167人（男79, 女88）であった。

手続き 心理学の授業時間中に集団実施した。質問紙の前半は14項目のHongリアクタンス尺度（Hong & Page, 1989）、28項目の治療リアクタンス尺度（Dowd et al., 1991）、24項目の独自性尺度（山岡, 1993）、10項目の集団主義尺度（山口・岡・丸岡・渡辺・渡辺, 1988）であった（“全くあてはまらない1—非常によくあてはまる5”の5件法）。

次に被験者は、説得場面についての自由記述を求められる。これは深田（1983）と同様の方法であり、説得場面の略画（Figure 1）では、他者からの説得に対する主人公の台詞が空欄の吹き出しになっていて、被験者は自分ならどう答えるかを考え、空欄に書くように指示される。場面には3種類あり、被験者はそのいずれにも記入する。息子が母親から部屋を掃除するように言われる場面は、私的空間への介入であり最も抵抗が生じやすい。学校に携帯電話を持ってこないように教官から言われる場面は、公的空間での規範遵守要請であり抵抗は生じにくくなる。一方、友人から街頭募金を促される場面では、その遂行には選択の余地があり、個人差が出やすいであろう。

さらに他者の発言の表現を変えることで、自由への脅威操作を行った。説得には脅威小（募金の例“あそ

こで募金をしているね、僕たちも募金しようか。”）と脅威大（“あそこで募金をしているね、君も募金をすべきだと思うよ。”）の2種類があり、被験者はそのどちらかを読んだ。脅威大条件では説得の圧力が大きく、行動の自由が脅かされる。

自由記述は3人の評定者が独立に“受容（言われたとおりにする）”“間接的拒否（拒否を明言せず、苦情を述べたり、後回しにしたりする）”“直接的拒否（拒否を明言し、断ったり、抗議して従わない）”の3カテゴリーに分類し、それぞれ3点、2点、1点と得点化した。これが説得効果の指標となり、数値が小さいほどリアクタンスの影響を意味する。

結果と考察

Hong 尺度

Hong 尺度（信頼性係数 $\alpha = .84$ ）の合計点は $M = 40.35$, $SD = 7.91$ であった。次に Hong 尺度の因子構造を検討した。重みづけのない最小2乗法で因子を抽出し、プロマックス回転（斜交解）を行った。因子負荷量が.4以上の項目に注目し、先行研究を参考に因子を命名した。ただし、他の因子にも同程度の重みがある項目は除外した。Hong 尺度ではスクリープロットの結果から3因子解を採用した（Table 1）。第1因子は項目1, 3, 2, 13に負荷が高く、“逆らうこと”“承諾—非承諾”に関係しているので“承諾へのリアクタンス”因子と命名した。第2因子は項目10, 5, 9, 12に負荷が高く、他者からの助言、影響への反発にかかわるので“助言・影響への抵抗”因子とした。また第3因子は項目6, 7, 8, 4に負荷が高く、不快な感情が共通しているので“選択制限への情動反応”因子と命名した。因子間相関はどれも中程度の正の値を示している。

Figure 1. “街頭募金”場面の略画例.

Table 1
Hong リアクタンス尺度の因子分析

質問項目	因子 1	因子 2	因子 3
1 規則というものがあると、反抗心がムラムラとわいてくる。	.881	-.152	.006
3 あることを禁じられると、“それこそが自分のやろうとしているものだ”と思うことがよくある。	.612	-.125	.147
2 人の意見に逆らうのは気分がいい。	.466	.274	-.079
13 あることをむりやりさせられそうになると、その逆のことをしたくなる。	.457	.260	-.061
14 人が社会の基準や規範に従わされているのを目にするとがっかりする。	.345	-.119	.120
10 自分の自由な意志で行動しているときだけ、満ち足りた気持ちがある。	-.284	.597	.239
5 助言というのは押しつけだと思う。	-.080	.584	.096
9 助言や勧告をされると、それとまったく逆の行動をすることになってしまう。	.349	.521	-.106
12 見習うべき手本としてほかの人を引き合いに出されると、ムカッとする。	-.022	.418	-.116
11 人が自分にあれこれさせようとしたら逆らう。	.342	.394	.107
6 ものごとを自分なりに自由に決められないと欲求不満に陥る。	-.044	-.008	.588
7 言われなくてもわかっていることを、人から指摘されるといらいらする。	.184	-.106	.534
8 選択の自由を制限されるとムカッとする。	.010	.068	.515
4 人の言いなりになることを考えるとしゃくにさわる。	.206	.065	.464
因子間相関	—	.650	.563
		—	.604
			—

Hong & Faedda (1996) は Hong 尺度が 4 因子からなることを報告しているが、彼らの“選択制限への情動反応 (6, 8, 7, 4)”因子は、本研究の第 3 因子に対応している。一方、Hong & Faedda (1996) の“他者からの影響への抵抗 (11, 12, 13, 10, 14)”因子は一つにまとまらず、本研究では他の 2 因子に分散した。この“他者・抵抗”と Hong & Faedda (1996) の“助言と勧告へのリアクタンス (5, 9)”が結合したものが本研究の第 2 因子である。また本研究の第 1 因子は、Hong & Faedda (1996) の“承諾へのリアクタンス因子 (項目 1, 3, 2)”に“他者・抵抗”が加わった内容である。つまり本研究の結果は、Hong & Faedda (1996) のものとほぼ対応しているが、1 因子少ない。

しかし Hong & Faedda (1996) の“助言と勧告へのリアクタンス”は、主成分法で抽出された 2 変数からなる因子であり、因子としての安定性は低いと考えられる。小口・岡田 (1999) の翻訳による Hong 尺度でも、本研究とほぼ対応する 3 因子が主因子法により抽出されている。したがって Hong 尺度は、本研究の因子順に記せば“強制への反抗”“干渉への反発”“情動反応”を内容とする 3 因子からなるとした方が適当であろう。

TRS

TRS ($\alpha = .78$) の合計点は $M = 81.72$, $SD = 10.46$ であった。TRS では性差があり、男子で得点が有意

に高かった (平均値は男子で 83.78, 女子で 79.88; $t(165) = 2.45$, $p < .05$)。

TRS の因子分析では、スクリープロットの結果から 3 因子解を採用した (Table 2)。第 1 因子は項目 25, 18, 21, 7 で負荷が大きく、同調傾向の逆転項目なので“非同調”の因子と解釈した。第 2 因子は項目 9, 15, 8, 26, 5 に負荷が高い。これらは自由の重視と意見の主張に関係しており、“自由のための主張”因子と命名した。第 3 因子は項目 10, 6, 2, 17 に負荷が高く、内容を問わず他者に逆らう“反抗”因子と解釈した。因子間相関は全体に低い。

Dowd et al. (1991) は TRS を因子分析 (主因子解、オブリン回転) し、2 因子解を採用している (“行動的リアクタンス” “言語的リアクタンス”)。前者は本研究の第 3 因子“反抗”に、後者は第 2 因子“自由のための主張”にほぼ対応する (Table 2)。さらに本研究では逆転項目が集まった“非同調”因子が抽出されたが、その内容は“同調性”尺度であり、削除候補となる。

両リアクタンス尺度の関係

Hong 尺度得点と TRS 得点の相関係数 r は $+ .63$ ($p < .01$) であった。両リアクタンス尺度は中程度の正の相関を示している。

次に両リアクタンス尺度の各因子を構成する項目を加算し、下位尺度得点を算出した。下位尺度間の相関係数と信頼性係数 α を Table 3 に示す。項目数が 4

Table 2
治療リアクタンス尺度の因子分析 (R=逆転項目)

質問項目	因子 1	因子 2	因子 3
25 人からの助言にはよく従う。R	.809	-.093	.054
18 人が“こうしたら”と言ってくれたことによく従う。R	.805	-.077	-.055
21 私自身の問題を解決するために、ほかの人が言ってくれた考えをよく受け入れる。 R	.649	-.180	.094
7 議論をすると、すぐ説得されてしまう。R	.464	.262	-.278
27 とても意地っばりで、自分流のやり方で押しとおす。	.338	.299	.010
28 まわりの人たち（仲間や同僚など）と仲良くやっていくことは、とても大切だと思う。R	.274	-.089	.124
13 仲間がほかのことをやりたいと言うので、自分の計画を変更することになっても、いらついたりしない。R	.235	-.122	.150
24 理由ははっきりしなくても、人のために何かをすることは苦にならない。R	.213	-.068	.086
16 頼みごとをされると、その人の本当のねらいが何なのか、よく考える。	.174	-.076	-.023
9 仕事や勉強で、自分がしたいと思っていることをもっと自由にやりたい。	-.204	.654	-.031
15 意見を聞かせるのはおもしろい。	-.127	.599	.032
8 議論が盛り上がってくると、我を忘れて熱中してしまう。	-.168	.557	.063
26 黙ったままでいるよりは、信ずるところに従って意見を述べる方がいい。	-.007	.495	-.121
5 私個人の自由は大切にしていきたいと心から思っている。	-.113	.469	-.036
11 恐くて人の意見に反対できないことがときどきある。R	.374	.400	-.218
1 出てきた料理が冷めていたら、店の人にそのことで注意する。	.028	.354	.058
20 影響力の強い地位につくことは大切だと思う。	-.182	.316	.240
19 どちらかといえば、自分の意見の正しさを主張する方だ。	.208	.311	.092
10 あれこれ指図されると、その逆のことをしてしまう場合がよくある。	.158	-.125	.610
6 “あまのじゃく”をするのはおもしろい。	-.127	-.040	.577
2 目上の人（教師や上司など）から、あれこれ指図されるとムカッとする。	.031	.189	.528
17 人が私を説得しようとするのは、とても我慢できない。	.113	-.099	.515
23 自分は協調的というよりも競争的だと思う。	.226	.254	.385
12 警官があれこれ指図するのはしゃくにさわる。	.070	.245	.376
4 禁じられていることを、ほかの人がやってくれると気分がいい。	-.058	-.114	.304
3 偉い人の話は、本当かどうかと疑ってしまうことがよくある。	.243	.106	.287
22 自分は正しいと考えているような人たちの誤りを、人前で指摘するのは楽しい。	.008	.085	.201
14 あれこれ指図されるのは気にならない。R	.084	.011	.147
因子間相関	—	.342	.335
		—	.198
			—

Table 3
Hong 尺度と TRS の下位尺度間の相関係数

Hong 尺度	TRS		
	非同調(.71)	主張(.67)	反抗(.64)
承諾 ($\alpha=.73$)	.263**	.236**	.613**
助言・影響 (.60)	.229**	.104	.534**
情動反応 (.68)	.299**	.370**	.345**

** $p < .01$

から5と少ないので信頼性は十分とはいえないが、TRSの“反抗”は、Hong尺度の“承諾”および“助言・影響”と中程度の正の相関がある。さらにこの相関行列を対象として階層クラスター分析（グループ内平均連結法）を行った（Figure 2）。TRSの下位尺度のうちHong尺度と密接な関係があるのは“反抗”だけであり、特に“自由のための主張”はHong尺度とは異質な内容であることが読み取れる。

リアクタンスはあくまで“自由侵害への反応”であるから、ただ単に“主張好き”であったり、自由拡大のために自分から議論を巻き起こしていくのはリアク

タンスではない。“自由のための主張”因子 (TRS) では、自由を重視する内容が含まれていたからよいが、それがなければ単なる“主張性”尺度であり、リアクタンス尺度ではなくなることに留意しなければならない。

“自由侵害への反応”というリアクタンスの定義と合致しない項目には、以上の“主張性・議論好き (8, 15, 19, 26)”“非同調” (7, 11, 13, 14, 18, 21, 24, 25, 28) のほかにも、自由侵害と関係ない項目 (1), 反応的でなく主導的な項目 (20, 23, 27), 反抗に悪意のある項目 (6, 22) が挙げられる。これらを除いて TRS を因子分析し、因子負荷の小さい項目を除去していくと、反抗 (2, 12, 3, 10, 17; $\alpha=.67$) と自由 (9, 5; $\alpha=.68$) の2因子を得る (全7項目の α は .61)。TRS の内容でリアクタンスの定義に合うのは、この“自由・反抗”の部分だけである。

結局、リアクタンス理論から見て妥当なリアクタンスの指標は、Hong 尺度全体と、TRS の“自由・反抗”下位尺度である。TRS の“自由のための主張”因子については、主張や議論の目的が自由回復であることがわかるような修正を考慮すべきであろう。

リアクタンス特性と説得効果

説得への自由記述反応を3人の評定者が分類したところ、そのうちの任意の2人の評定者間の一致率は 0.72–0.82 であった。脅威大条件の反応例を次に示す。受容反応として“はい”“気をつけます”“そうだね、募金しよう”。間接的拒否として“今やろうと思ってたんだよ”“わかった、後でやるよ”“すみません。でも (携帯電話は) 必要なのです”“募金するよ。でも何で‘すべき’なのさ”“少しくらいなら募金しようかな”。直接的拒否として“気になるなら自分でやれ”“何ですか、別にいいと思います”“いやだよ。募金したいなら1人ですれば”。直接的拒否は、脅威大条件でも場面を問わず最も小さい比率であり、間接的拒否の方が生じやすい傾向がうかがわれた (例えば部屋掃除場面では、受容が 27.7%、間接的拒否が 60.3%、直接的拒否が 12.0%)。

説得への自由記述反応とリアクタンス尺度得点 (各総得点および下位尺度得点) の相関係数を計算した (Table 4)。有意な相関係数はすべて負の値であり、説得の圧力の大小を問わず、リアクタンス特性が高い

Table 4
説得効果とリアクタンス尺度得点の相関係数

	部屋掃除	携帯電話	街頭募金
Hong 尺度	-.314**	-.176*	-.130
1 承諾	-.313**	-.166*	-.111
2 助言・影響	-.272**	-.068	-.179*
3 情動反応	-.185*	-.195*	-.022
TRS	-.282**	-.323**	-.074
1 非同調	-.242**	-.198*	-.008
2 主張	-.090	-.179*	-.103
3 反抗	-.212**	-.165*	-.064
(自由・反抗)	-.302**	-.239**	-.060

* $p<.05$, ** $p<.01$

ほど説得効果が小さいことを示している (仮説 1 はほぼ支持された)。

街頭募金場面ではリアクタンス総得点と説得効果の有意な相関が見られなかったため、リアクタンス特性と脅威操作の交互作用を検討した。Hong 尺度得点、TRS 得点のそれぞれ上位 25%・下位 25% をリアクタンス特性高群・低群とし、説得効果得点に関するリアクタンス特性 (高・低) $\times$ 脅威 (大・小) の2要因分散分析を行った。Hong 尺度の結果 (Table 5) については、脅威の主効果と Hong 尺度 $\times$ 脅威の交互作用が有意であった (それぞれ $F(1, 77) = 5.57, p < .05$; $F(1, 77) = 4.76, p < .05$)。また、Hong 尺度の主効果に傾向が認められた ($F(1, 77) = 2.79, p < .10$)。次に、交互作用が有意であったので下位検定を行った。単純主効果を見ると、Hong 尺度高群では脅威大条件において説得効果が低く ($F(1, 77) = 11.81, p < .01$)、また脅威大条件では Hong 低条件で説得効果が高い ($F(1, 77) = 9.02, p < .01$)。社会的に望ましい行動が求められる場面では、リアクタンスは表出されにくく、全体として承諾傾向が優勢になると考えられる。このような抵抗しにくい場面で抵抗できるのは、リアクタンス特性の高い人であり、しかもそれは押しつけがましく説得された場合に限られる。なお、TRS の高低による TRS $\times$ 脅威の交互作用は、傾向は Hong 尺度の場合と同様であったが、有意水準には達しなかった ($F(1, 76) = 1.83, p = .18$)。

一方、相関分析では脅威の大小が込みになっているが、リアクタンス特性の高い人は、説得圧力の小さい条件 (脅威小) でも抵抗を示す可能性がある。脅威小条件に限って同様に相関係数を算出すると、部屋掃除場面の説得効果は Hong 得点と $-.298 (p < .01)$ 、TRS 得点と $-.264 (p < .05)$ 、携帯電話場面の説得効果は Hong 得点と $-.193 (p < .10)$ 、TRS 得点と $-.352 (p < .01)$ の相関を示した。説得が穏やかな場

Figure 2. リアクタンス下位尺度のクラスター。

Table 5
Hong 尺度と自由への脅威が説得効果（街頭募金）
に及ぼす効果

Hong 尺度		自由への脅威	
		小	大
高	<i>M</i>	2.63	1.96
	<i>SD</i>	(0.50)	(0.69)
	<i>n</i>	16	24
低	<i>M</i>	2.55	2.52
	<i>SD</i>	(0.76)	(0.60)
	<i>n</i>	20	21

Table 6
独自性および集団主義とリアクタンス尺度得点
の相関係数

	独自性	集団主義
Hong 尺度	.422**	-.300**
1 承諾	.374**	-.218**
2 助言・影響	.226**	-.230**
3 情動反応	.416**	-.267**
TRS	.619**	-.406**
1 非同調	.345**	-.359**
2 主張	.503**	-.156*
3 反抗	.287**	-.245**
(自由・反抗)	.462**	-.286**

* $p < .05$, ** $p < .01$

合でさえ、リアクタンス特性が高いほど説得効果が低減するという知見は注目される。

リアクタンス特性と文化的要因

独自性尺度（信頼性係数 $\alpha = .74$ ）および集団主義尺度（ $\alpha = .66$ ）の各合計得点と、リアクタンス尺度得点（各総得点および下位尺度得点）の相関係数を計算した（Table 6）。独自性尺度はリアクタンス尺度と正の相関関係にある（仮説3支持）。逆に集団主義尺度は、リアクタンス尺度と負の相関関係にある（仮説2支持）。なお、独自性尺度と集団主義尺度の相関係数 r は -0.27 ($p < .01$) であった。

これらはリアクタンスが集団主義とは相容れず、個人主義と表裏一体であることを示唆している。集団主義文化の社会ではリアクタンス動機づけが優勢ではなく、それを顕著に示すのは個人主義的傾向の強い人だけであろう。集団主義文化においてリアクタンスをどう位置づけるかは、今後慎重に検討すべきである。本研究では集団主義尺度の信頼性がやや低く、また個人

主義の指標も間接的なものととどまっている（独自性欲求）。今後の課題としては、個人主義と集団主義の両方を測定できる尺度（e.g. Triandis, 1995）を用いて、個人主義・集団主義とリアクタンスとの関係をさらに調べることが挙げられる。

引用文献

- Brehm, S. S., & Brehm, J. W. 1981 *Psychological reactance: A theory of freedom and control*. New York: Academic Press.
- Dowd, E. T., Milne, C. R., & Wise, S. L. 1991 The therapeutic reactance scale: A measure of psychological reactance. *Journal of Counseling and Development*, **69**, 541-545.
- 深田博己 1983 心理的反発に関する発達の研究 島根大学教育学部紀要, 教育科学, **17**, 31-39.
- (Fukada, H. 1983 A developmental study of psychological reactance. *Memoirs of the Faculty of Education, Shimane University. Educational Science*, **17**, 31-39.)
- Hong, S.-M., & Faedda, S. 1996 Refinement of the Hong psychological reactance scale. *Educational and Psychological Measurement*, **56**, 173-182.
- Hong, S.-M., & Page, S. 1989 A psychological reactance scale: Development, factor structure and reliability. *Psychological Reports*, **64**, 1323-1326.
- 今城周造 2001 説得におけるリアクタンス効果の研究——自由侵害の社会心理学—— 北大路書房 (Imajo, S.)
- Kim, U., Triandis, H. C., Kagitcibasi, C., Choi, S., & Yoon, G. 1994 Introduction. In U. Kim, H. C. Triandis, C. Kagitcibasi, S. Choi & G. Yoon (Eds.), *Individualism and collectivism*. Thousand Oaks CA: Sage. Pp. 1-16.
- Merz, J. 1983 Fragebogen zur Messung der Psychologischen Reaktanz. *Diagnostica*, **XXIX**, 75-82.
- 小口孝司・岡田尚子 1999 リアクタンスの3次元 昭和女子大学生活心理研究所紀要, **2**, 14-31.
- (Oguchi, T. & Okada, N. 1999 Three factors of psychological reactance. *Showa Women's University Institute of Practical Psychology Bulletin*, **2**, 14-31.)
- Snyder, C. R., & Fromkin, H. L. 1977 Abnormality as a positive characteristic: The development and validation of a scale measuring need for uniqueness. *Journal of Abnormal Psychology*, **86**, 518-527.
- Snyder, M. L., & Wicklund, R. A. 1976 Prior exercise of freedom and reactance. *Journal of Experimental Social Psychology*, **12**, 120-130.
- Triandis, H. C. 1995 *Individualism and collectivism*. Boulder, CO: Westview Press.
- Tucker, R., & Byers, P. Y. 1987 Factorial validity of Merz's psychological reactance scale. *Psychological Reports*, **61**, 811-815.

- 上野徳美 1986 自由への脅威と受け手の独自性がリアクタンス現象に及ぼす効果 心理学研究, 57, 228-234.
(Ueno, T. 1986 Effects of threats to attitudinal freedom and the recipient's uniqueness on psychological reactance phenomenon. *Japanese Journal of Psychology*, 57, 228-234.)
- Yamaguchi, S. 1994 Collectivism among the Japanese: A perspective from the self. In U. Kim, H. C. Triandis, C. Kagitcibasi, S. Choi & G. Yoon (Eds.), *Individualism and collectivism*. Thousand

Oaks CA: Sage. Pp. 175-188.

- 山口 勸・岡 隆・丸岡吉人・渡辺 聡・渡辺久哲
1988 合意性の推測に関する研究(I)——集団主義的傾向との関連について—— 日本社会心理学会第29回発表論文集, 176-177.
- 山岡重行 1993 ユニークネス尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 社会心理学研究, 9, 181-194.
(Yamaoka, S.)

——2001. 8. 6 受稿, 2002. 3. 2 受理——